

歴史をへカタル

—物語史の中の大鏡—

辻 和良

大鏡の語りの表現構造については、これまで概して、注意が払われにくい傾向にあったが、ここ二、三年に集中して問題に取り上げられるようになって来ている。^①それらの問題意識は、物語史の中に大鏡をいかに位置づけるのかというところにあるが、本稿の問題意識もまたそこにある。語りの表現構造の分析を通じて大鏡の物語史上の位置づけを考える契機としての意味を今回は担っている。

一、世継のひとり語り

雲林院の菩提講に、この上なく高齡の翁ふたりと媪ひとり、そして三十歳ばかりの生侍ひとり、の合わせて四人が昔語りをし、その話を女房らしき者(記者)が側で聞いて、書き残したというのが大鏡の設定であるが、そこからすれば語りの「へ場」が作品全体のそここに描かれていて当然のように思えるのだが、事実はそうではない。序、天皇紀余談、藤原氏物語、そして雑々物語などは、対話形式を用いるなどして語りの「へ場」を描こうとする傾向にあるが、その他の部分つまり、天皇紀、大臣列伝という大鏡の大部分を占めるところはそうではなく、ほとんどが世継のひとり語りという印象である。大鏡全体の語りの構造を分析するにあたって、天皇紀・大臣列伝に特徴的に見えるこの世継のひとり語り、見た目の印象だけでなく、ほんとうに語りする方法として意図的にひとり語りたらんとして

いるのかどうか、確認しておく必要がある。

菩提講の舞台での語り手としては、世継ばかりでなく繁樹も同様にその資格を持っているはずで、事実彼は序において世継に向かって、次のように言っている。大鏡の語りの「へ場」での役割が出そろっているところでもあるので、その全体を引用しておこう。

「いで、さうざうしきに、いざたまへ。昔物語して、このおはさう人々に、さは、いにしへは、世はかくこそ侍りけれど、きかせたてまつらむ」

といふめれば、いま一人、

「しかしか、いと興あることなり。いで覚えたまへ。時々さるべきことのさしいらへ、繁樹もうち覚えはべらむかし」

といひて、いはむいはむと思へるけしきども、いつしか聞かまほしく、おくゆかしき心地するに、そこらの人多かりしかど、ものはかばかしく耳とどむるもあらめど、人目にあらはれて、この侍ぞ、よく聞かむと、あどうつめりし。

(序、三八—三九)

世継が主たる語り手であることは言うまでもないことであるが、それに対する繁樹もまた、決して黙っている存在として規定されているわけではない。「時々さるべきことのさしいらへ」をいかに消極的に解釈したとしても、すぐ後の「いはむいはむと思へるけしきど

も」が、繁樹も含めての様子を示しているのだとすれば、世継の語りにも、繁樹が補足することを十分に期待させる表現であることは揺るがない。

にもかかわらず、繁樹は天皇紀・大臣列伝にあってはほとんど活躍せずに、世継の語りの聞き手に終始しているばかりである。忠平伝において、最もその印象が深い。彼は忠平に仕え続けたのだから世継以上に事情に精通していて当然で、それからすればすべてで無くともその大半は彼が語るべきであるはずなのに、本文の事実として、忠平伝にはついに繁樹の語りは存在していないのである。

繁樹が、世継ほどに記憶が確かでなく、語り手の能力にかけていたということも、可能性としてありえなく無いとはいえ、たとえば、

繁樹がいふよう、

「いであはれ、かくさまさまにめでたきことども、あはれにもそこら多く見聞きはべれど、なほ、わが宝の君に後れたてまつりたりしやうに、もののかなしく思うたまへらるる折こそ侍らね。八月十日あまりのことにさぶらひしかば、折さへこそあはれに、『時しもこそあれ』とおぼえはべりしものかな」

とて、鼻たびたびかみて、えもいひやらず、いみじと思ひたるさま、まことにその折もかくこそと見えたり。

(藤氏、三七〇)

という記事や、

ことごと問はむ、と思ひたまへしほどに、昭宣公の君達三人おはしまして、え申さずなりにき。それぞかし、時平のおとどをば、「御かたちすぐれ、心だましひすぐれ賢うて、日本にはあまりせたまへり」と相しまうししは。枇杷殿をば、「あまり御心う

るはしくすなほにて、へつらひ飾りたる小国にはおはぬ御相なり」と申す。貞信公をば、「あはれ、日本国のかためや。ながく世をつぎ門ひらくこと、ただこの殿」と申したれば、「われを、あるが中に、才なく心詔曲なりと、かくいふ、はづかしきこと」と仰せられけるは。

(雑々、四一六―四一七)

という記事などがその可能性を否定して、繁樹の語り手としての能力を十分に証し立てている。

ところで、右の二つの記事は、このことを示す目的のためにのみ引用したのではない。両記事は、見るとおり忠平関連記事という点で共通している。忠平伝が大臣列伝に存在していることからすれば、これらの記事は、そこに含まれるのが何よりふさわしいはずである。ところが、先にも述べたように忠平伝には繁樹の語りはいっさい存在していない。忠平伝以外で繁樹の語りが無いこと以上に、この事柄の持つ意味は大きい。

語り手たる可能性のあるのは世継の外には繁樹しかない。その繁樹が最も得意とするだろうところにおいてさえ、彼の語りが無い。大臣列伝の語りの方角として、このことを理會しようとするれば、世継のひとり語りを目指して、繁樹の語りが排除されたのだと考えるのが、一番ふさわしいのではないだろうか。

基経伝の次の記事もそのことを支持している。

この昭宣公の大臣は、陽成院の御舅にて、宇多の帝の御時に、准三宮の位にて年官・年爵をえたまひ、(略)。御男子四人おはしましき。太郎左大臣時平、二郎左大臣仲平、四郎太政大臣忠平

といふに、繁樹、けしきことになりて、まづ後の人の顔うち見

わたしで、

「それぞ、いはゆる、この翁が宝の君貞信公におはします」

とて、扇うちつかふ顔もち、ことにをかし。

(基経、八九)

大臣列伝の中で、繁樹が忠平についてまったく何も言わないかというところではなく、このような発言はしているのである。しかし、この繁樹の発言は、世継の語り新たな情報を加えるという性質のものではなく、語りとしては何も言っていないに等しいと言わざるを得ない。繁樹はここで、語り手であるどころか、世継を取り巻く聴衆のひとりに過ぎない位置に立たされてしまっているのであり、それに対応して、世継のここにおける唯一の語り手としての立場がより確かなものになっているのである。

忠平伝の中の次の記事は右の状況をより一層進めている。

こと殿ばらの御ことよりも、この殿の御こと申すは、かたじけなくもあはれにもはべるかな

(忠平、一一三)

と、世継は繁樹の気持ちを慮って、涙声になって忠平のことを語った。

繁樹に対する世継の配慮から、繁樹が忠平と深い関係にあったがゆえに、世継の語りを聞く繁樹の気持ちには推察するにあまりあるものがあるだろうことなど、こちらに伝わるべきものはあるにはあるが、実はこればかりのことで、繁樹が本来語るべき事柄の代わりにさせられてしまっているのである。

基経伝では、それでもまだ振り返った繁樹の姿が見え、声も聞けた。しかし、忠平伝では繁樹の姿も見えず、声も聞こえてこないままに、ただ世継のひとり語りだけが聞こえて来るのである。

歴史をへカタル

繁樹の語りの排除による世継のひとり語り、これが大臣列伝が結果的にではなく意図的に求めた語りの方法であった。なお、天皇紀の語りの方法も、大臣列伝と多くの共通点を持つことから同じように考えて差し支えないと判断している。

二、語りの「場」——記者の眼——

天皇紀・大臣列伝を除くその他の部分には、対話形式による表現が目立ってなされていて、いかにも翁たちが対談しているかのように表現されている。語りの「場」が対象化されて、ことさらに表現の表に生かされているという印象が強い。これに対して、天皇紀・大臣列伝が世継のひとり語りを方法としていることは、どのように考えればよいのであろうか。

天皇紀・大臣列伝において、語りの「場」がどのように扱われているか、という形に問題の立て方を変えてみよう。この時、とくに注目されるのが、世継のひとり語りの間に何度も現れる記者のことばである。記者のことばは具体的には、陽成紀・醍醐紀・基経伝・時平伝・忠平伝・実頼伝・師尹伝・師輔伝・兼通伝・道隆伝・道長伝(上)の各々に、一箇所乃至三箇所ある^②。

およばぬ身に、かやうのことをさへ申すは、いとかたじけなきことなれど、これは皆人の知ろしめしたることなれば、いかなる人かは、この頃、古今・伊勢物語など覚えさせたまはぬはあらむずる。(略)末の世まで書き置きたまひけむ、おそろしきすき者なりかしな。いかに、昔はなかなかにけしきあることも、をかしきこともありけるもの」

とて、うち笑ふけしきことになりて、いとやさしげなり。

「二条の后と申すは、この御ことなり。」

(一一三)

(陽成、四八)⁽³⁾

該当する記者のことばの一番はじめのもので、この後、光孝についての世継の語りが続いて行くのであるが、記者のことばとしては傍線部にあるような形に類するものがほとんどである。いくつか用例を挙げておくと、

「とて、覚ゆめる」 (醍醐、五五)

「とて、音うちかはりて、鼻たびたびうちかむめり」 (忠平、一一三)

「とて、目おしのごふに」 (実頼、一一五)

「と、せめてささやくものから、手を打ちてあふぐ」 (師輔、一六一)

「とて、ほほゑむ」 (兼家、二六一)

ところで、記者のことばは大鏡全体に広く存在していて、天皇紀・大臣列伝中のみ存在しているわけではない。しかし、天皇紀・大臣列伝中のそれと、その他の部分のそれとの間には、小さからぬ異なりがある。天皇紀・大臣列伝においては、世継のひとり語りをその方法として選択した必然的な結果として、例えば右の陽成紀の用例にみるように、記者のことばの前後で語り手が変わらないのがほとんどであるが、逆に、対話形式をとるその他のところでは、記者のことばの前後で語り手が変わるのが普通となっているのである。

記者のことばの前後で語り手が変わらない場合には、そこでことさらに句切りをつけた印象が、そうでないものよりも一層強く与えられるはずで、記者のことばの印象も強くなり、そのことよって、語りの〈場〉を表現の表に強く押し出すことになる。その点について、対話形式の場合には、表現内容の空間的広がり、〈場〉の対象

化の多くを任せているだけに、記者のことばの役割は小さくなっていくと言えよう。

また、世継ら語り手を記者のことばが細かに描写していることに注目しなければならぬ。語りの〈場〉の対象化ということからすれば、語り手たちの対象化が一番はじめに浮かんでくる事柄である。世継のひとり語りを句切る記者のことばは、このように二つの意味で、語りの〈場〉の対象化をおこなっているのである。記者が語りの〈場〉にありながらも、一歩退いたところからその〈場〉を対象化しているということ、これを外側からの語りの〈場〉の対象化と言うことができるだろう。

ところで、大鏡を見ている限りではまったくと言ってよいほどに問題にならないが、語り手の様子を細かに描写するというのは、物語史上注目しておいてよい事柄である。例えば、源氏物語の場合には、すでに指摘されているように、雨夜の品定め段が同じ様な構造を用いて表現されているが、それはあくまでひとつの段をまとめる方法であって、決して全体を扱う方法ではなかった。全体としてみる限り、源氏物語の語り手は最終的な語り手(書き手)によって描写されることはなかったのである。

つまり、語りの表現構造という点から言えば、大鏡がその主たる方法としておこなっている語り手の描写は、世継ら語り手たちと同じ時空間に、筆記者の役目を負った女房を配置したことによって、物語史上はじめて成功した画期的な事柄なのである。⁽⁴⁾

三、語りの〈場〉—今—

大鏡が歴史を語る〈今〉を仮構したことについては、早く塚原が次のように指摘している。⁽⁵⁾

過去があつて、現在がある。それが時間の原理である。だが、大鏡の作者にとって、現在があつて過去がある。現在がなければ、過去もない。(略)作者の視点は、現在に定着する。

従うべき指摘であるが、語りの〈場〉の対象化という観点から、このことを捉え返してみることができないのではないだろうか。

世継らの語る現在を示す〈今〉の用例は、大鏡全体に見いだすことができるが、とくに天皇紀・大臣列伝においては、〈場〉の対象化という点で、ひとり語りする世継の姿を描写することと同様にその担う意味は重い。

世継の口にする〈今〉は、彼の語る現在すなわち万寿二年を強調するのがひとつの大きな目的であるわけだが、そのことばは言うまでもなくそこに居合わせた聴衆に向けられたものである。つまり、〈今〉に接したとき、意識するとしなむに聞わらず、言わば否応なく私たちは聴衆の次元に引きずり込まれてしまい、次の瞬間それと気付くことによつて結果的に、語りの〈場〉を意識させられてしまふということになるのである。

忠平伝に次のような記事がある。

つねにこの三人の大臣たちのまゐらせたまふ料に、小一条の南、勘解由小路には、石だたみをぞせられたりしが、まだ侍るぞかし。宗像の明神のおはしませば、(略)おほよそその一町は、人まかり歩かざりき。今はあやしもの者も、馬・車に乗りつつ、みしみしと歩きはべれば、昔のなごりに、いとかたじけなくこそ見たまふれ。この翁どもは、今もおぼろけにては通りはべらず。今日もまゐりはべるが、腰のいたくはべりつれば、術なくてぞまかり通りつれど、なほ石だたみをばよきてぞまかりつる。南のつらのいとあしき泥をふみこみてさぶらひつれば、きたなき

ものも、かくなりて侍るなり」
とて、引き出でて見す。

(忠平、一一〇—一一一)

「今は」、「今も」そして「今日も」と、短い部分に畳み掛けるように、語る現在の〈今〉を用いている。これは、昔を知る翁の現在に対する思いを、聴衆に強く表出しているのであるが、注意してみると表出の強さの分だけ強く私たちは、世継に向き合っている聴衆のひとりへと引きずられていくのが分かるだろう。作品に向かう私たちの〈今〉——生きていく現在の——が、強く表出された世継の語る現在の〈今〉に転位させられてしまう。私たちは次の瞬間には、みずからの〈今〉に立ち戻るのであるが、語る現在の〈今〉に引きずられた強さだけ鮮明に、語りの〈場〉を意識することになる仕組みである。

世継はさらに、石だたみを避けて汚れた着物の裾を自分の語りの証拠として提示する。〈今〉が畳み掛けられた後だけに、その裾を見ようと身を乗り出す聴衆の中に、私たちが自分の姿を認めたとしてもおかしくはない。無論、その後ふたたび、語りの〈場〉を強く意識し直すことになる。

この点については、さらに次のことにも留意しておかなければならないだろう。引用文中にある、「この翁ども」、「腰のいたくはべりつれば」、「南のつらの・・・かくなりて侍るなり」などの表現が、自己対象化した世継の表現であること、そしてその表現は、世継が聴衆を意識し、聴衆に直接語りかけることによつて導かれて来るものであるということである。

世継の語りはずべて聴衆に向けてなされているものではあるが、ここに言うのは、直接聴衆に向き直つて語る場合のことである。そ

ここにおいてはやはり、語りの時間は過去の時間であることを離れて、世継の語る現在の〈今〉に立ち戻って来るのである。語りの〈場〉の対象化がなされることは明らかである。〈今〉の表現のひとつと考えておいてよいだろう。

さて、世継がみずからの語りの証拠を提出して来ることは、彼と同じ登場人物である聴衆に対しては、その語りの真実性の保証になるかも知れないが、それをもって、大鏡の作品としての真実性を保証もしくは、強調していることにはならない。世継の提出する語りの証拠は、ここに分析したように、語る現在の〈今〉による語りの〈場〉の対象化を導くところに意味があるのである。

また、〈今〉に類するものに、「この」というのがある。例えば、右の引用に続く世継の語りに、

「先祖の御ものは何もほしけれど、小一条のみなむ要にはべらぬ。人は子うみ、死なむが料にこそ家もほしきに、さやうの折、ほかへわたらむ所は、なににかはせむ。また、おほよそ、つねにもたゆみなくおそろし」とこそ、この入道殿は仰せらるなれ。

(忠平、一一一)

とあるのがそうである。

「この入道殿」が、道長をさすことは明らかであるが、こここの世継の語りの中に、前もって道長が登場しているわけではなかった。「この入道殿」の「この」は、さきに出てきた人物を指し示すための「この」ではない。これは、語りの文脈を越え出た、時代という大きな文脈によった「この」である。このような「この」は、一条や藤原氏全体、頼通の子の通房などにも用いられるが、その用例はきわめて少なく、道長を表す場合に限るといってもよい。世継があらゆる物差しを捨て去って、最も身近に捉えている人物が道長であ

り、その語りに耳を傾ける聴衆もまた、そのように捉えている、そのようなことを、「この」が端的に示している。語りの〈場〉の対象化という点では〈今〉の働きと同じであるが、万寿二年をも含み込むより根本に触れた表現であることにおいて、注目しておかなければならない。

以上、〈今〉の表現構造とも言うべきものを分析してきたのであるが、それは、語る現在の〈今〉を物語に内在させることで、語りの〈場〉を語りの内側から対象化していくものであった。

四、〈語り〉と歴史

ここまで、天皇紀・大臣列伝の語りの方針について考えてきた。その中で明らかになってきた事柄は、天皇紀・大臣列伝は、繁樹の語りを排除することによって、意図的に世継のひとり語りを選びとったということ、そして記者による語り手の描写や語る現在の〈今〉の強調などによって、語りの〈場〉の対象化がなされ、語りの構造が強調されていたということであった。この二つの事柄の間には、どのような関係が存在しているのであろうか。

語りの構造の強調について考えてみると、〈語り〉の枠組みに対する大鏡の固執のようなものをその原因として第一に挙げなければならぬだろう。大鏡はなぜ〈語り〉の枠組みに固執するのだろうか。

よしなきことよりは、まめやかなることを申しはてむ。よくよく、たれもたれも聞き召せ。今日の講師の説法は、菩提のためと思し、翁らが説くことをば、日本紀聞くと思すばかりぞかし

(余談、七五)

この部分が、虚構による真実を主張した源氏物語の螢巻の物語論を意識し、もどいていることは明らかである。妄語であることによ

て源氏物語は唯一非難を受けた。大鏡は「まめやかなること」を語ると宣言する。源氏物語をもどくと同時に、これは歴史叙述をももどいている。歴史叙述に対する裏側からの自信のようなものが見え隠れしている。歴史事実を素材にしながら歴史を語る振りをするのである。

世継の語りについて、小峯は次のように言う。⁸⁾

実体験を装うことで語りの信憑性や迫真性が確保されるわけだが、前代の語り部と異なり、世継には語りの聖性や正統性を保証しうる根拠はどこにもない。(略)世継はそれを講師の授戒を先取りする形で講会の場自体にもとめざるをえなかったのである。

確かに、

ただし、さまでのわきまへおはせぬ若き人々は、そら物語する翁かなと思すもあらむ。わが心におぼえて、一言にても、むなしきことくははりて侍らば、この御寺の三宝、今日の座の戒和尚に請ぜられたまふ仏・菩薩を証としたりまつらむ。

(雑々、四一三―四一四)

と言う世継のことばからすれば、彼は自分の語りの保証を仏法に求めたと言わざるを得ない。しかし、その一方で、

いひつづくることどもおろかならず、おそろしければ、ものもいはで、皆聞きあたり

(余談、七三)

というように、彼の語る内容の異常さに、聴衆が思わず聞き入ってしまうということがあるのにも注意する必要がある。無論、これが、仏法が保証すること以上のものを世継の語りに与えていると言うつもりはない。ただ、このことから、世継の仰々しい保証のことばの表現と内容との間に、ある距離を感じてしまうことは否定でき

歴史をへカタル

ない。大鏡は、源氏物語や歴史叙述とともに、仏法に保証を求めることをももどいてしまっているのである。

そして、このようなもどきを表現する枠組みとして、対象化した語りの〈場〉が最もふさわしい。語りの〈場〉の対象化は、古代的感覚としての〈語り〉の聖性・正統性に対する信仰を喪失することによって可能になる事柄であって、それが果たされたところでは、歴史叙述のひとつの大きなよりどころである〈語り〉の聖性を、何の拘りもなく歴史を記述することに利用できるのである。

歴史叙述をもどいて、歴史を語る振りをする、すなわち歴史をへカタル大鏡が、〈語り〉の枠組みに固執することは、大鏡の物語としての本質に根ざしている。

さて、序における設定を無視して、世継のひとり語りが叙述方法として選択された理由を考えれば、天皇紀および大臣列伝の歴史的記述を指したものとするほかない。いかに歴史を語る振りをするとはいえ、史実を扱う限り荒唐無稽に語るわけにはいかないということも理由として考えられるが、何よりも藤原氏の歴史を道長の栄華につながる形で説き起こして行くという語りの目的があるのである。

これを果たすためには、なんらかの統一性が必要になって来る。編年史の形をとるならば通時的時間がおのずとひとつの統一をもたらしだそうだが、そうでなくて、しかも語りの〈場〉を設定した場合、記述にひとつの統一をもたそうとすると、語り手の立場を定めて語りの視点を統一するのが最も有り得る方法となる。その統一性を背景にして、語りの目的が果たされるのである。世継のひとり語りの理由は、ここにある。

語りの〈場〉の対象化と世継のひとり語りとは矛盾する事柄であ

(一七)

るが、それだけに両者の切り結ぶところに、大鏡の独自の表現構造が生み出されているようである。ここに視点をすえると、藤原氏の歴史を絶対視せず、仏法をももどき、歴史叙述からも距離をおいて「カタル」——語る振りをする大鏡像が見えて来るのではないだろうか。

一方に源氏物語、もう一方に歴史叙述をにらみながら、大鏡は独自の立場を確立しようとする。そのどちらからも、一定の距離を保っている。今回は、それらの関係の見取図を書こうとしたものであった。より正しい距離の計測を目指したい。

注

- (1) 益田勝実「虚構(同時代史)の語り手——大鏡——作者のおもかげ——」(国文学、一九六六・二)、塚原鉄雄「大鏡形象の虚構設定」(『王朝の文学と方法』、一九七一・一、風間書房、所収)が、早くに大鏡の語りについて取り上げた注目すべき論である。小峯和明「大鏡の語り——語り手と筆者の位相——」(日本文学、一九八八・二)は、最近の論の中で本稿に特に関わって来るものとして重要である。これは、同「大鏡の語り——菩提講の意味するもの——」(国文学資料館紀要一二、一九八六・三)をはじめとする一連の論文の中のひとつである。
- (2) 兼通伝については、流布本系本文にある記事である。
- (3) 日本古典文学全集本『大鏡』による。括弧内は、天皇紀・大臣列伝については各人物名、序・天皇紀余談・藤原氏物語・雑々物語については、「序」・「余談」・「藤氏」・「雑々」の略称と全集本の頁数とを記す。本文に加える傍線、傍点の類は、すべて論者によるものである。『大鏡』については、以下同じ。
- (4) このような観点からは、(1)に挙げた益田、小峯論文にも論じられている。ところで、天皇紀・大臣列伝には、対話形式による描写がま
- (5) (1)に挙げた塚原論文に同じ。
- (6) 「今」の用例だけでなく、それに類する「ただいま」、「今日」、「この」なども含めて考えている。要するに語る現在の時をあらわす語である。
- (7) 丹羽正三「大鏡の説話の叙法——とくに実見談的話法について——」(平安文学研究、一九七五・一一)が、この辺りのことを取り上げている。真实性を強調するもの、作者の興味・志向・関心のとくに強いところを示すものとして押さえている。実見談的話法として独立させるのではなく、〈今〉に関わる語りの方法の一環として理會していくべきだろう。
- (8) (1)に挙げた小峯論文に同じ。